

# 方向

第一〇八号

一九九〇年一月一日

京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内 方向社

かたじけない

1989.12.5.

原 田 慶

新聞の囲み記事にこんなことが書いてあった。

：作家の高橋三千綱さんが、神戸で開かれた講演会でスチュワートの「ちょっといい話」を披露した。

高橋さんは：後輩の結婚式に出席した。「結婚前、新婦のスチュワートに「なにか面白いことはないか」と聞いたら、こんな話をしてくれた」

機内で「おしほりでございます」と言っているうち思わず「おしほりでございます」と言ってしまった。

実年男性が「かたじけない」と言って受け取ってくれた。：

これを読んで、わたしは何となく感動した。実年男性というのがどんな人かわからないが、飛行機に乗って忙しく駆けまわるビジネスマンだろうと想像したのである。すこしの時間にも仕事のことを考えていなければならぬ人に、スチュワートが「おしほりでございます」と言ったら、ほんとうに「かたじけない」という気がしたのかもしれない。そこにある、人と人との一瞬のいたわり合いのようなものを感じたのである。

いま「かたじけない」という言葉を使うことはめったにないけれど、意味は「恥ずかしい」「面目ない」「もったいない」「恐れ多い」「身にしてみてありがたい」などと辞書にでている。テレビの時代劇などではよく「か

たじけない」という言葉が使われるので、子どもでもわりあい知っているのではないかと思うけれど、たいていの場合「身に染みて有難い」「恐れ多い」という意味に使われている。言葉として「かたじけない」が使われなくても、そのように感じることは決してなくならないので、わたしたちの日常にも、年齢を重ねるにつれて、感動することが多くなる。何を見ても、長い年月を生きたぶんだけ、深く考えてしまうのかもしれない。

「かたじけない」ということではないけれど、テレビで相撲を見ていて、小錦が優勝したとき、主人はひどく感心した。

「うん、よう頑張ったな、よう頑張った。えらい。この人はなかなか勉強家やで、よう研究してるわ。よかったな。外国人でここまでいったのは高見山と小錦だけや。しかも角番やった。えらいもんや、よかったな」

とにかく努力する人には讃辞を惜しまないし、人のやさしさは、身にしみてありがたいと思うようである。

十月だったと思う、東京の三鷹にいる長女が、作業衣を縫って送ってくれた。濃紺で、ゆったりとして着やすいらしくて、いつも愛用して洗って洗濯するひまもない。わたしも、せっかく喜んで着ているのだからと思つて、脱いで出掛けていったときに、大急ぎで洗って糊をつけ、乾いたらすぐアイロンをかけておく。帰ったらさっそく着ている。縫ってくれた人にも、洗ってくれた人にも「かたじけない」と思つてあんなにいつも着るのだろうか。

十二月一日は、比叡山延暦寺のお坊さん方が、大津の坂本地区で愛の托鉢ということをされる。歳末助け合い運動に寄付をするためののだそうである。今年もその様子がテレビや新聞に出ていた。九十四歳の山田恵諦座主



が、脇を支えられながら先頭に立って歩かれる。町の人々は手を合わせて拝み、志を差し出している。この様子を見ると、思わず涙が出て、「かたじけない」という気がする。多くの人の賛同を得るためには、それだけの積み重ねが必要である。人々の幸せのために何かをしたいと考えても、その資格を得るためには、それだけの道のりがある。突然にいいことをしようと悪い立っても誰も信用してくるものではない。

冬は野菜がおいしくなる。大根、ほうれんそう、はくさい、キャベツ。それに豆腐などの加工品や、調味料もおいしくするためにずいぶん研究されている。

「食事が、毎日三度、こんなにおいしいなんて、ほんとにありがたいことや」

と主人がいう。主婦は、おいしく食べられるように工夫しているつもりだから、料理の仕方がいいのかと思っただけにこにこしているけれど、鍋料理などは、昆布をしいて、野菜や豆腐を熱くしただけで、おろし大根を造るのにちょっと手間がいるくらいのものである。それがおいしいのは、はくさいや豆腐そのものがおいしいということになる。ああこんなにおいしい物を造るために、毎日働いている人があるのに、わたしは何か役に立つことをしているだろうか、にわかに反省する。

この雑誌『方向』に、わたしも、見てきたことなどを書かしてもらい、おかげで忙しいと言いながらも、元気に走りまわっている。書くようになった始まりは、主人の誕生日のお祝いに、娘と二人で手造りの本をつくった時である。わたしが庭の草や花のことを書き、娘がカットや表紙を描いた。それを主人が『方向』に掲載し、文章を書くのは自分のためになることだから続けなさいといわれ、仕方なく書き続けた。たしかに自分のためとは

思うけれど、やはりそれだけでは書けないもので、これをお送りして、受け取ってくださる方があるから続けられる。なんと幸せなことだろう、ほんとうに「かたじけない」と思う。でも、わたしの心のなかでは、そういう言葉で考えているのではなくて、「ありがたい」「もったいない」「恐縮する」などといった気持ちにちかいようだ。

この「かたじけない」は、もと、容貌の醜いことをいう言葉だったそうである。「ありがたい」は有ることが難しい、めったにない、という語だから、めったにないほど醜いということ、有り難いに通じ、だから、もったいない、恐れ多いなどの意味に使われるようになったのだろうか。いずれにしても、今ではふつうの生活の中で使われることはほとんどない。

新聞を読んでから主人に食事を知らせに行き、「お昼でござる」と言ってみたが、主人は「はいはい」と返事をしただけだった。次の日、庭で仕事をしていたので、コーヒーを持って行って、もう一度「コーヒーでござる」と言ってみた。しかし「そうか」とこたえただけで、まったく乗ってくれそうにないので、「ござる」はやめにした。飛行機の実年男性は、さすがに乘りのいい人だったようである。

障

子

貼

り

1989.12.13.

原

田

慶

ガラス戸を開けたら縁側にイチヨウの葉が舞い込んできた。クルミも散りつくして屋根の上に雄鹿の角のよう



な枝を突き出している。ムクもモクレンもほとんど散り、柿の葉は、緑のまま落ちて、のこった数枚がようやく赤味をおびてきた。鳥のために供養しておいた柿の実がかぞえてみたら五個、光のかげんで見え隠れする。墓地の櫓がサルノコシカケに養分を吸収されて、ほとんど枯れてしまった。主人が何度もたいて取り除いているが、また広がってくるので気味が悪い。凶鑑には、枯れた木に生じると書いてあるのに、すぐ近くのムクの枯木から移って、まだ生きている木にとりついてしまった。

日の暮れるのが早く、五時には暗くなる。縁側のカーテンを閉めにいって、外を見るたびに不思議な風景にであう。隣の寺の墓地を越えて、千本通りに沿った家々の裏側が見える。風呂屋、五色豆屋、自転車屋、パン屋。いろいろな商店があるはずだけれど、風呂の大煙突のほかには、どの家の裏がどこなのか、ほとんど見分けがつかない。以前はそれだけで、あとは空だった。煙突から空に向かって、もくもくと煙りが出ている。『今日もお風呂は沸いているな』と思って楽しかった。夜の十時ごろにはあたりが静かになって、風呂に入れられて泣いている赤ん坊の声や騒ぐ子どもの声が響いてきた。このごろは、家に風呂を造るところが多いのか、子どもがおとなしくなったのか、あまり声が聞こえない。そして、煙突の向うにビルの鉄骨が立ちふさがっている。夜になると、白いスクリーンを張った鉄骨の中に、作業をするための電燈がついて、まるで大きな行燈のように、空に浮かび上がっている。なんと見ても奇妙な風景だと思う。早く作業の終わった夜は、中の光が消え、逆に外からの光に照らされて、少し遠くに退いて見える。遅いときは夜の十一時ごろでも光がついて作業をしているらしい。光はすっかり通すのに、人影は見えない。

光の透けた白い構図を見ていたら、映画「利休」で見た光の空間を思い出した。秀吉に蟄居を申しつけられて、その後、切腹を命じられるまでの間の住いで、部屋の中に、かたつむりのような渦巻の空間をつくり、竹か木で作った棹組みに和紙を貼っていた。これが最後の茶室だろうなどと言ひ、ふたりだけで居るなんて初めてですわと笑いながら、妻とふたりで一枚一枚と貼ってゆく。画面ではその中心に灯がともされていて、光を包み込んで、白い紙が輝いていた。二人にとってはほっとするような瞬間だったように見えた。妻は利休に、北政所を通じて秀吉に執りなしてもらおうようすめたけれど、利休は聞き入れなかった。はいつくばって生きるより死んだ方がいいと言った。その気持はよくわかるけれど、このような場に立たされた女ほどつらいものはない。死を覚悟した心の静かさを三國連太郎の利休はとてよく演じていた。信念を通した利休と、自分で切腹を命じておきながら何となく落ち着かない秀吉の気持を画面に見せることで、映画の製作者は、利休が秀吉に勝ったのだということとを、観客に感じさせようとしているようだった。利休が自決したのが天正十九年二月二十八日で、妻と娘がその三月八日に石田三成の拷問をうけて死んだとされている。映画のなかでも石田三成は、利休の言ったことを曲げて秀吉に告げ口したりして、悪い人に扱われていた。真実は誰にもわからないのだからうけれど、茶道が、現在でも盛んなのだから、やはり利休は大した人だったに違いない。

あんなに何もかも忘れたように楽しんで障子貼りができればいい。若い頃にはわたしなども作業そのものが楽しかった。障子を貼るのおもしろかった。だんだん仕上がるのまずさが目について、敵ができた、あくが滲み出している、紙がいびつになったなどと、失敗ばかり気になって、貼るのが大儀でたまらなくなつた。



映画を見ていて、いいなあと思ひ、あんなふうに虚心に、楽しそうにべたべたと障子を貼ってみようかなあと思っていた。

明日は障子を貼ろうと考へながら夜の景色を眺めて、次の日、しぐれ空が晴れて、雲が南へ移動するので、陽がさしたり陰ったりした。夜空の大きな行燈は、昼間みると、ただの建築中のビルで、薄汚れたビニールにつつまれた石のようにそっけない。障子紙がなくなっていたので、いつもの紙屋さんへ行ってみたら、その店はもうやめてしまっていた。他になかったかなと思ひながら、心当りのほうへ歩いてゆくと、二筋目の細い通りに古い紙屋さんがあつた。まちがえて美濃判を買ってきたので、半紙判に変えにゆく。この思ひ違ひがくせになつてゐる。寺の障子は、半紙判でも二拵貼つて六分あまるが、美濃判では二拵半の中がある。どちらでも紙巾を少し切り落とさなければならぬ。楽しくやろう、笑いながらべたべた貼ろうと思ふけれど、いつの間にか一所懸命になつてしまふ。利休さんのように名人芸とはいかない。床の間の小さな障子は無事すんで、玄関の障子にかかる。コトコトという音がするので、障子が、立てかけた柱にあたる音かと、手をやすめて見たが、そうではなくて鳥の鳴き声だった。ウグイスみたいな色で、からだはふっくらしている。すつと飛んでマサキの笑をくわえ、となりのモクレンの枝にとまる。なんという鳥だろうか、ひっそりと、コトコトという、空洞の筒がぶつかりあうような音で鳴く。

ムクロジの葉が黄いろくなつて、その一角だけが目覚しく明るい。朝、道路の落葉を掃いていたら、勤めに出かける男の人が、見上げて振り返り「これ、きれいですね」と言った。「ええほんとうに、きれいに黄葉しまし

た」と答えて、わたしはなんとなく「アア、ハハハ」とわらった。「葉が落ちて掃除が大変ですね」といってくれる人はあるけれど「きれいですね」といってもらったので安心した。破れた爪のようになり、枝にからまっている枯葉、風に葉をむしりとられたように、さんざんなイチョウ。毎年のことだけれど、その年の気候によって少しずつ様子がちがう。

障子の紙をはがして、よごれを拭く、力を入れすぎたのか、棧がカタツとはずれる。ここは以前から折れていたのだった。糊をべたべたつけて、楽しんでやろう、歌うようにやろうと考える。やっと貼り上がったら、糊がよってあちこちはがれ、口のあいだにあるところがある。今年は紙屋さんが違ったから紙の質が変わって、糊が薄すぎたのかもしれない。もう一度糊をつけ、乾いてから霧を吹いておいたら、なんとか見られるようになった。

学校から帰ってきた娘が「障子がきれいになったんやね」といった。わたしは「う、うん」と返事をしながら、毎度のことだけれど、次の時はもうちょっと上手に貼ろうと考えていた。

## 仏教音楽をめぐって (下)

捨てることなく

1988.7.14. 本法寺で 原田憲雄

さて、一口に音楽と申しましても、従来のいわゆる東洋音楽もあれば西洋音楽もあり、世俗楽もあれば宗教楽もあり、器楽もあれば声楽もあります。器楽には、リード、ソナタ、ロンド、スイート、セレナード、ファンタジー、交響詩、カノン、フーガなどの諸形式があり、声楽には、リード、アリア、レツィタティーフ、カンター



タなどの諸形式があります。われわれはそのどれ一つとして捨てる必要はなく、むしろあらゆる種類、形式のものをりっぱに作り上げるのが望ましいのですが、さきにいったような条件のもとでわれわれ自身の手で作り上げるとすれば、簡単な、やさしい形式のものから始めるより仕方がありません。器楽なら一種類か、せいせい二、三種類ぐらいの楽器で演奏できるもの、声楽でも、そのていどの楽器の伴奏で演奏できるものを、当面の目標にすればいいかと思えます。楽器も、ピアノやヴァイオリンにかぎらず、ハーモニカでも、マンドリンでも、オルガンでも、エレキギターでも、鐘でも、太鼓でも、木鉦でも、とにかくあるに従ってそれを利用することを考えればいいでしょう。さいわい現在では楽器がひじょうに発達しましたので、頭を働かしさえすれば、思いがけない効果も生まれましょう。さきごろやってきたビートルズなども使用楽器はわずかでした。エレキギターはお年寄りや道徳家には評判が悪いようですが、使い方によっては、莊嚴な法要の伴奏にもけっこう利用できるだろうと思います。こういう言い方は、あるいは、奇異にも感ぜられるかもしれませんが、いま法要で使う饞鉦は、中国の古代楽では主として軍楽に使用されたもの、太鼓は近代の初期まで、これは世界のいたるところで軍楽に使われたものであることを顧みれば、ふしぎではなくなるでしょう。

作曲というと、わたくしたち戦前の教育を受けた者は、楽譜のオタマジャクシも読めないのが普通ですから、たいそう面倒にも、おつくうにも感じるのですが、戦後に教育を受けた人は、音符の読めない者が少なく、かなりの人が簡単な作曲ぐらいはできる基礎的な知識をさずけられています。ここにお集まりの方でも三十代以下の方ならば、すでに作曲なさった方もあり、今までは作ったことがなくても、すこし勉強なされれば、かなり有望

なのではないかと察します。作曲という作業には、碁や将棋をさすのと似た一面があるように思います。碁や将棋をしなければならぬような暇のある方、棋譜を研究するほどの抽象的な思考にたけていらっしゃる方は、ひとつ作曲という作業にその時間とエネルギーを注いでいただけないでしょうかと念願いたします。

さきにちよつと触れましたビートルズは、自分で作曲し、演奏しますので、その作曲について、専門家のあいだではあれはムチャクチャだとけなす人があり、革命的だと褒める人もいます。そういう正反対の意見が専門家の間に出るといふことは、今までに見出された法則だけが音楽の法則ではない、ここからもいくらかでも法則としようなものが出る可能性を示しているわけで、この可能性が、『法華経』にいわゆる「地涌の菩薩」であろうかと思えます。音楽について深い知識を持つ者だけがすぐれた曲を作るわけのものでもなく、専門家もかつては素人だったのですから、素人だといってむやみに卑下する必要はありません。専門家を無視したり、従来の音楽の法則をことさらに破るのがいいと申しているのではないことはもちろんです。ただ、専門家でなければ何もできないと考えることはない、素人でも信仰に励まされて努力すれば、時として専門家のできないようなことも仕出かすものだ、ということをお申すのです。『法華経』は歴史的にみれば、保守的な僧侶衆団にあきたりなくなつて、そこから飛び出し、あるいは放逐された革新的なピクとそれを支持する新興の大衆たちの間から生れたのだそうです。だとすれば、専門家でない人間の作る音楽は『法華経』にふさわしいといえなくもありません。

『法華経』の口語訳を

声楽曲では、音楽と文学とがいわば結婚したような関係にあります。ふつうの音楽なら歌詞、オペラなら台本



が、ここでいう文学です。ところで歌詞や脚本は、それが表面ではどれほど世俗的なものであっても、その根本、その源泉は仏典、われわれの場合は『法華経』にもとづけるのが、仏教音楽の在り方であろうと思います。作曲家、演奏者はいうまでもありませんが、歌詞を作り、脚本を書く人たちが、たえず仏典、『法華経』を読み、味わっていることが必要です。けれどもわたくしたちの平生となえている仏典、『法華経』は漢訳で、たいへんむつかしい。訓読したところで、そう誰にでも分かるものではありません。この席にお集りの方はいずれも本宗の僧でいらっしゃいますから、いわば『法華経』の専門家です。失礼ですが、今あなたがたに『法華経』のどこかの一節をとって、これを中学生にわかるように説明してくださいとお願いしましたら、して頂けるでしょうか。わたくしもまた日蓮宗の僧で、大学では漢文を教えているのですが、残念ながら漢訳『法華経』はなかなかむつかしく、分かりにくいところがたくさんあります。そんなところは南条文雄、岩本裕、紀野一義など諸氏の訳本や、いろいろな学者の論文を参考にして考えることにしていますが、そういうことを誰にでも求められるものではありません。だから誰にでも理解できる仏典、『法華経』、すくなくとも言葉のうえだけでもわれわれの日常生活のものに近い言葉で書かれた仏典、『法華経』がぜひ必要なのです。これは音楽を作るといふことを考慮にいれなくても必要なので、『法華経』をよりどころとする日蓮宗が、今もって宗定の『口語訳・法華経』をもたないのは、よっぽどどうかしているのです。それならせめて、宗門の最高学府である立正大学で試訳を作って示すぐらいはするのが義務であろうと思いますが、それはありません。キリスト教では、バイブルの日本語訳が何とおりもあり、それをまた絶えず改訳していることは、ごぞんじでしょう。仏教教団でも、真宗では、浄土三部経

も親鸞の著作の主だったものはみな現代語訳ができています。

『法華経』は、さきにいったもののほかに江南文三氏の『日本語の法華経』のような優れた訳があります。しかしいずれも個人訳であり、また殊に岩本氏は『法華経』を信ずる立場の人ではありません。それだから悪いところではありません。個人でさえが、信じない人でさえが試みていることを、『法華経』を信仰の中心とする日蓮宗が、七百年の歴史をけみしながら、まだ宗定の『日本語訳・法華経』すら出しえていない怠慢を反省するのです。これも待っていたら、わたくしどもが死ぬまでに願いがかないそうにありませんから、わたくしはわたくしなりに、ぼつぼつ口語訳を作っておりますが、皆さんがたのなかにも同じ気持の方が多くでしょうし、すでにその試みをやっておられる方もごさいませうから、それらの成果を集めて練り上げてゆくほかはありません。わたくしが、こんなに口語訳のことを申しますのは、わたしたちは自分の言葉で考えるのでなければ、ほんとうに考えたことにはならない、というのが事実だからです。お坊さん方の間では「一念三千」とか「諸法実相」とかいう言葉は、わかりきったことだとして話にのぼされます。それを一つ突っ込んでみますと、人によって理解がまちまちです。坊さんの間でさえそれほど確定しない言葉を使って、どうして宗教なんの関心もない人に『法華経』を説くことができませう。共通に理解できる「言葉」という地盤で語りあえなければ、布教もくそもあったものではありません。それには『法華経』を現代の口語に直してみることが先決です。

話がたいへん飛躍しましたが、ともかくわたくしたちは、『法華経』にもとづき、そこから得た生きいきした感動を、今のわたくしたち、あるいはこれから成長する人達とともに歌えるうつくしい詩を、できるだけたくさ



ん作りたいたいものです。これも一人だけではだめで、なるべく多くの人が、たくさん作ることが大切です。つくられた詩のすべてが作曲するにふさわしいとは限りません。二十に一つもあればよいくらいでしょう。たくさん詩があればそこから適切なものが選び出せます。また作曲するにも、一つの詩に対して何人ものひとが作曲して、そのうちのよいものを残してゆけばよいのです。

### とんな曲が

楽曲の種類としては、法要礼拝用がまず必要です。これはあるていど良いものができれば、模範演奏をやり、テープにとり、複製して配給すれば、一般の寺院でだちに使うことができます。これには莊重典雅なものがいでしょう。そのほか、集会用、日常にくちずさめるもの、あるいはさまざまな間奏樂など、多ければ多いほどよろしいでしょう。注意すべきことは、いわゆる「ありがたい」調子のもの、とりすましたものばかりではないけないだろう、ということ。『法師品』第十九に、

常精進菩薩よ、もしりつばな若者や娘たちが、この経をたもち、読み、誦え、解説し、書き写すとしよう。

これによってかれらは千二百の耳の功德を得るであろう。この清らかな耳によって、三千大千世界の下はアピーチ地獄から上はアカニシユタ天にいたるまでの、そのなかの内外のありとあらゆる声を聞くだろう。象の声、馬の声。牛の声、車の声、啼く声、嘆く声、法螺貝の声、太鼓の声、鐘の声、鈴の声、笑い声、しゃべる声、男の声、女の声、童子の声、童女の声、法に合った声、法に合わぬ声、苦惱の声、快樂の声、凡夫の声、聖人の声、喜びの声、喜ばぬ声、天の声、竜の声、ヤクシャの声、ガンダルヴァの声、アシユラの声、

ガルダの声、キンナラの声、マホーラガの声、火の声、水の声、風の声、地獄の声、畜生の声、餓鬼の声、ビクの声、ビク尼の声、声聞の声、独覺の声、ボサツの声、仏の声を聞くであろう。要するに三千大千世界のなかの内外のいっさいの声を、また天の耳を得ていなくても、父母からうけたきよらかな普通の耳によって、みなことごとく聞き分けるであろう。

とあります。『法華經』をたもつ者の耳に、すべての物音も声も聞こえるというのは、『法華經』を信ずる者は、すべての物音にも声にも耳を澄まし、そこに『法華經』の声を聞け、ということであり、すべての声、すべての物音には『法華經』を讀める声が含まれている、ということでもありますから、わたくしたちは、それぞれの物音や声に、形を与えて音楽にしななければならないことになります。

宗教音楽とか、仏教音楽とかいう言葉にとらわれて、狭く限り、苦しみの声、悲しみの声、地獄の声、餓鬼の声に耳をふたぎ、あるいは聞いて聞かぬふりをし、きれいごとで済ませておくのであつてはなるまいと考えます。

「序品」第一にも、

世尊が眉間の白い巻き毛から光りを放って東方の一万八千の世界を照らされると、その光はくまなく放射して、下はアビーチ地獄にいたり、上はアカニシユタ天にいたつた。それらの世界には、六道に落ちた生きものたちが見え、それらの世界に住む仏たちが見え、諸仏の説かれる教えも聞こえた。

と示されています。これは『法華經』が宇宙をつらぬく真理であることを説かれたものとおもいます。それならば、いのちあるものは、キリスト教徒であろうが、イスラム教徒であろうが、念仏、真言、禪の信者であろうが、



かれらが意識するしなにかかわらず、『法華経』につつまれて生きていくはずでありましょう。地獄の声も、畜生の声も、デーヴァダッタの声も『法華経』を讃える声として響きうるものなら、キリスト教徒ないし禪の信者の声が『法華経』讃歌として響いてふしぎはない。それならいわゆる異教徒の作った音楽のなかから、撮取すべきものは大いに撮取すればよい、ということになります。

もっとも、歌詞や脚本という点からいえば、『法華経』を現代語訳すれば、それがそのまま使用できましようし、日本古来の詩歌のなかから、例えば『梁塵秘抄』だとか、勅撰集、私家集のうちに、言葉は古いが作曲するのもってこいの作も少なくありません。近世から近代にかけての詩人のうち、元政上人や宮沢賢治の作品などは、ほとんど全部『法華経』讃歌なのです。そう考えれば、わたしたちは現に大きな宝庫を手に入れているわけで、努力しさえすれば、この宝庫から限りなく音楽が取り出せるはずだと信じます。

#### おわりに

とりとめのない話で、お聞きづらかったことと存じます。また話のなかに、宗門の樞要の地位にいらっしゃる方々への非難がましい言葉もまじって、けしからんとお考えの方もおいでであろうかと察します。

わたくしは、宗政や宗学の責任を負っていらっしゃる方々に対して、私的な憎悪や怨恨をいただくものではありません。そのお一人お一人に対しては、尊敬と愛情とをもってつもりです。会ってお話すれば、みないい方だろうと感じます。ただ、そういう方々が集まって、しておられることを、遠くから拝見しておりますと、宗祖以来の先達がのこされた精神的・物質的遺産を使い果たすことに忙しく、今の宗門がせひしなければならぬ

大切なことが何一つできていない。法華世界の広大な視野が失われ、現にある日蓮宗という小さな宗団のなかに、種々様々の党派をつくり、ワクの中にまたワクを仕切って、その団体のエゴイズムで身動きならなくなり、何のためにやっているのか分からない争いに忙しく、肝心の『法華経』をひとりでも多くの人々に手渡すための努力がいつこうに進まない、これが残念でならないのです。派手なお祭り騒ぎは、今の世の中ですから、金があればできます。だが、お祭り騒ぎで人が良心や信仰を改める時代は、もう過ぎました。『法華経』の翻訳とか、讃仏歌の作製というようなことは、目立たない、労苦の多い仕事です。そうしてその成果はすぐには現れてこないものです。だが、そういう努力の積み重ね以外に、信仰を深める手段などあろうとは思われません。目立たぬ苦勞がしたくないなら、初めから坊さんになんぞならないほうがよいのではないか、とも思われます。わたくしなども、おのれの至らなさを省みますと、僧である身が恥ずかしく、在俗信者となつてつつましく過ごすほうがよいのではないかと思つたりもします。そういう迷いのなかで『法華経』を読んで、またその迷いが恥ずかしくなる、ということを繰り返しております。けつして人を非難する気持はありません。ただおのれを含めて日蓮宗の現状がもどかしいばかりであります。尽くさぬ言葉ですが、徹意をお汲み取りくださいますならば幸いです。清聴を感謝いたします。

上原淳道 「『説文解字』に關する一考察」 1989.12.26. 原田憲雄  
一世紀から二世紀にかけての中国の、許慎の文字学の書『説文解字』に



瑠、石之似玉者、从玉、眉声、說若眉。へ从の字は従の字と同じ

のように、いわゆる形声の字の説明に「従A、B声、說若B」という形式の一群があり、これを「Aに従い、Bの声、読むことBのごとし」と読み、その意味を、親文字ABは「Aを（形、又は、意味を表わす）構成部分としている。ABの音はBである。ABはBのように読む（発音する）」と理解するとすれば（これが、いまのほぼ一般の理解であろう）、「B声、說若B」という説明は、全く同じことを重複して言ったことになり、なぜそのような説明をするのか理解に苦しまねばならなくなる。このことには先人も気づいているが、こんにちまで解決されたとはいえない。そこで上原氏は「Aに従い、Bは声」と訓読し、訓読の意味するように理解してはどうか、と提案をしている。その根拠は、ほぼ次のように要約できようか。

許慎は、形声の説明に「以事為名、取譬相成」という。この「取譬」の語は、『詩經』大雅・抑の「譬えを取ること遠からず」や『論語』雍也の「よく近く譬えを取る」などを頭において使用しているのだから、「譬え」を取るばあいにも、近くて適切なことも、遠くて不適切なこともあることを承知したうえで、近くて適切なのがよいとされたのだろう。これをさきの文字の音の説明に返して、

親文字ABの声Ⅱ音は本来はBであるべきはずであるのに、かれの時代にはBに近い場合もBから遠い場合あり、かれ以前の時代にも同様であったかもしれない、実際にはどうであったかわからない、と思ったからではないか。許慎は「AB、∴B声」と書いたが、その「B声」とは、単にBは音を表わす部分、または、符号であるという意味であって、親文字ABの音はBであるという意味ではなく、親文字ABの具体的な音につい

ては許慎は判断を保留ないし放棄していたのではないか。

という。つまり「AB、∴、B声、読若B」は、「ABなる字は、∴∴、Bは音を表わす部分で、げんさいBと発音している」という意味であり、「AB、∴∴、B声、読若C」ならば「ABなる字は、∴∴、Bは音を表わす部分だが、げんさいはCと発音している」という意味になる。「説文解字」には後のような説明のほうが多く、その間に、前のような説明のものが混じっている。後（<sup>レ</sup>前）のものの説明が無意味な重複でないとすれば、伝統的な訓読より、氏の新しい訓読と、意味のとりかたのほう（<sup>レ</sup>前）が、筋道がとおることになろう。

文字学にうとい（うといのは文字学にかぎらぬけれども）わたしには、批評・批判する資格はないが、文中の氏の言葉からすると、この新説は「通説とはかなり異なつた思ひきつた」「ラディカル（根元的）なこと、ドラスティックなこと」であるようだ。

今日の文字学（中国古代文字学）の立場（または、あまりよいことばではないが、水準）から許慎の（『説文』の）文字学の理論に批判を加えることも全く意味がないとは言われないが、それよりも重要なこと、あるいは、それに先んじてなすべきことは許慎の文字学の理論をできるだけ正確に理解することであろう。

論文の終りに近いところで氏はこう言う。その「理解」のための作業として書かれたこの論文はドラスティック（激烈）かもしれないが、綿密である。長いつきあいで氏の印象は、慎重の人、である。氏は、みずからを「愚者」とよぶが、その「愚」は、『老子』第二十章にいわゆる「ひとり人に異なる」「愚人の心」なのかもしれない、とふと思つた。この論文は、新刊の中国古代史研究会編『中国古代史研究 第六』に収める。



3-5. さて、世尊はそのとき、次の偈を説いた――

あなたは、シャーリプトラよ、未来の時に、ジナである世尊となつて、  
華光という名で、普遍の眼をもち、幾百億の衆生たちを導くだろう。(23)

幾千万多数の仏に供養して、修行の力を獲得し、

十種の智力が発生し、通達するだろう、最高の無上道に。(24)

無量無限のカルバのち、「大宝莊嚴」というカルバがあり、

また「離垢」という世界があつて、両足の最高者の清らかな国だ。(25)

瑠璃をしきつめたその土地は、黄金の糸でふちどりされ、

幾百ものうるわしい宝玉の樹が、果実や花々で飾られている。(26)

記憶すぐれたその多数のボサツたちは、修行の成就にたくみであり、

幾百の仏のもとで修行をまなび、そのうちこの国にあらわれる。(27)

そのジナは最後の化身で、王子としての役割に時間を過ごし、

愛欲を捨て、出家して、通達するだろう、最高の無上の道に。(28)

まさしく十二アンタラ・カルバが、そこでのそのジナの寿命であり、

また人々の寿命の長さも、八アンタラ・カルバであろう。(29)

このジナが涅槃するとき、三十二アンタラ・カルバが満ちるまで、

妙法は存続しよう、天ともなる世界のひとの利益のために。(30)

その妙法が消滅し、似た教えがさらに三十二アンタラ・カルバの間つづいて、

救世者の遺骨はひろくゆきわたり、つねに人・天に供養されよう。(31)

このような世尊がやがて現れる、よろこびたまえ、シャーリプトラよ、

あなたこそ、このようなひと、たぐいなき両足の最高者なのだ。(32)

alha khalu bhagavāns tasyām velāyām imā sāthā abhāsata ||

bhavisyase śārisutā tuham pi anāgate dhvāni jinas tathāgatah /

padmarāhu nāma samanta-cakṣur vinesyase prāṇi-sahasra-koṭyah ||23||

bahu-buddha-koṭīsu karitva saktriyām carvā-balam tatra apārajayitvā /

utpādayitvā ca daśo balāni sprīśisyase uttamaṁ agra-bodhim ||24||

acintīye aparimitasmi kalpe prabhūta-ratnas tada kalpu bhesyati /

virajā ca nānā tada loka-dhātuh ksetraṁ visuddham dvi-padottamasya ||25||

vaidūrya-samstīrṇa tathaiiva bhūmiḥ suvarṇa-sūtra-pratimāṅditā ca /

ratnā-mayair vrkṣa-śatair upetā sudarśanīyah phala-puṣpa-māṅditaiḥ ||26||



smṛtīmantā tasmīn bahū-bodhisattvāḥ carvā 'bhīnīrhāra-sukhovidās ca /  
 ye śikṣitā buddha-śatesu cariyāṃ te tatra kṣetre upapadya santi #27#  
 sa ca jīnaḥ paścimake samucchraye kumāra-bhūmīm atināmayitvā /  
 jāhītvā kāmān abhīnīskramitvā spṛśisyate uttamaḥ āgra-bodhīm #28#  
 sama dvādaśā antara-kalpa tasya bhaviṣyate āyu tadā jīnasya /  
 manuḥjānam abhyantara (W: manuḥjāna pī antara) -kalpa aṣṭa āyus-pramāṇam tahi tesa bhesyati #29#  
 parinirvṛtasyāpi jīnasya tasya dvātrīṃśatīm antara-kalpa-pūrnām /  
 saddharma saṃsthāsyati tasmī kāle hitāya lokasya sadevakasya #30#  
 saddharmi kṣīṇe pratirūpako 'sya dvātrīṃśatī-antara-kalpa sthāsyati /  
 śarīra-vaistārika tasya tāyīnaḥ susatkṛto nara-marutais ca nityam #31#  
 etādṛśaḥ so bhagavān bhaviṣyati prahrṣta tvam śārisuta bhavasva /  
 tvam eva so tādṛśako bhaviṣyasi anābhībhūto dvi-padānam uttamah #32#

3-6. さて、それら四衆、ピク・ピク尼・男の信者・女の信者や、天・竜・ヤクシャ・ガンダルヴァ・アスラ、  
 ガルダ・キンナラ・マホーラガ、人や人でないものたちは、長老シャーリプトラが無上の正しい覺りを得  
 るだろうと、世尊の前で授記されるのをじかに聞いて、満足し、躍り上がり、喜び、うきうきし、棄しみ、  
 上機嫌で、おのおのの衣を世尊に供養した。天の王である帝釈、シャバ世界の主である梵天、その他、幾

千万億の天子たちが、世尊に天上の衣を供養し、また天上のマーンダーラヴァ華や大マーンダーラヴァ華を降らせた。また天上の衣を上空でひらひらさせ、幾百千の天上の樂器や太鼓を上空でうち鳴らし、大きな花の雨を降らせて、こう言った「以前に世尊はヴァーラーナシーの仙人が集まる鹿野苑（ろくやおん）で法輪をまわされたが、いままた世尊は、最高の第二の法輪をまわされた」と。

atha khalu tās catasrah parsado bhiksu-bhiksuno-upāsakopāsikā deva-nāga-yaksa-gandharvāsura-saruda-kinnara-mahorasa-manusyāmanusyā āyusmataḥ śāriputrasyedam vyākaraṇam anuttarāyām samyak sambodhanu bhagavato 'ntikāt sammukham śrutvā udagrā ātmanasah pramuditāḥ pṛīti-saumanasya-jātāḥ svaka-svakaiś cīvarair bhagavantam abhicchādayāmāsuḥ / śakraś ca devānām indro brahmā ca sahaṃ-patir anyas ca devaputra-śata-sahasra-katyo bhagavantam divyair vastrair abhicchādayāmāsuḥ / divyaiś ca mādāravair mahāmāndāravaiś ca puspair abhyavakiranti sma / divyāni ca vastri-āṅy upary antarikṣe bhrāmayanti sma / divyāni ca tūrya-śata-sahasrāṇi dundubhayaś copary antarikṣo parāhananti sma / mahantaḥ ca puṣpa-varṣam abhipravarṣayitvaivaḥ ca vācam bhāṣante sma / pūryam bhagavatā vārāṇasyām rṣipatane mṛśadāve dharmā-cakraḥ pravartitam idam punar bhagavatā 'dyanuttaram divitiyaḥ dharmā-cakraḥ pravartitam ॥

3-7. これらの天子たちは、そのとき、次の偈を説いた――

あなたは法輪をまわされた、世界で比類ないかたよ、



偉大な勇者よ、ヴァーラーナシーで、諸羅の生滅を。(33)

最初にまわされたのはあそこだが、第二はここです、導師よ。

かれらには信じることの難しい教えが示されたのです、いま、導師よ。(34)

多くの法を聞きました、わたしたちは救世者とむきあつて、

このようなおしえは、前にはけつして聞いたことがありません。(35)

われわれは共に喜びます、偉大な勇者よ、大仙たちの多義のことばを、

熟練した聖者のシャーリプトラに授記されたことを。(36)

われわれもまたこのような、この世界での無上の仏となり、

多義のことばで、無上の仏の覺りを説きたいもの。(37)

わたしたちが、この世でも他の世でも、善をおこない、

仏を喜ばせたことが、覺りに役立ってほしいものです。(38)

*te ca deva-putrās tasyām velāyām imā gāthā abhāsata ||*

*dharmā-cakram pravartesi loke aprati-pudgala /*

*vārāṅśyām mahā-vīra skandhānām udayam vyayam ||33||*

*prathamam pravartitam tatra dvitīyam iha nāyaka /*

*duḥśradadhēya yas tesām deśito dya vināyaka ||34||*

bahu-dharmah śruto 'swābhir loka-nāthasya samukham /

na cāyam idrśo dharmah śruta-pūrvah kadā-cana ||35||

anumodāna mahā-vīra saṁdhā-bhāṣyam mahā-rṣiṇam (W: rṣiṇah) /

yathāryo vyākṛto hy eṣa śāriputro viśāradaḥ ||36||

vayam apy edrśāḥ syāmo buddhā loka anutarāḥ /

saṁdhā-bhāṣyena deśento buddha-bodhin anutarām ||37||

yaḥ chrutam(W: chubham) kṛtam asmābhir asmīmi loka paratra vā /

ārāgitaś ca yad buddha(W: sambuddha) prārthanā bhotu bodhaye ||38||

(24) 偈の「十種の智力」とは、(5) 偈の「力も、解脱も、すべてむなし」という「力」を十種に開いたもので、①道理にかなうかかなわぬかを弁別する力。②行為の原因と結果との関係を知る力。③禪定を知る力。④衆生の機根を知る力。⑤衆生の願望を知る力。⑥すべての存在の本性を知る力。⑦衆生の行方を知る力。⑧自他の過去を知る力。⑨衆生の死と再生を知る力。⑩涅槃とそこへいたる方法を知る力。これらは仏やボサツがそなえているべきだと、人々の考えた知的能力を分類したもので、分類の仕方ではさらに大きくも小さくも分けられよう。十という数字が円満完全をあらわすという感じ方があるため、十種に分類することが多い。

「法輪をまわす」は、「教えること」「法を説くこと」を、車を運転することにたとえたので、釈尊の最初の説法を「初転法輪」というが、いまの『法華経』の説法は、第二の、さらに重要な、転法輪だ、というのである。